

3 熊本県地域における須恵器の受容と展開

木村 龍生

はじめに

須恵器は古墳時代中期になって我が国で生産が開始された土器である。須恵器は朝鮮半島から伝わった新しい技術を用いて器形を成形・整形し、窯を使用した還元炎焼成を行うため、それまでの土師器製作と異なり専門の工人集団が必要である。そのため、須恵器の生産は独自に模倣して自発的に開始することは不可能で、専門の工人集団の技術的指導等がなければ行えないものである。

このような須恵器の生産状況から、須恵器が生産され始めた当初、須恵器は生産拠点も限られ、生産数もそれほど多くなかったと思われる。なにより生産・流通のネットワークなども確立していなかったであろうことを考えると、須恵器を生産できない地域の人々にとって須恵器は“お宝”であったに違いない。

5世紀代の熊本県地域は、この須恵器を生産できない地域のひとつである。おそらく5世紀の終わりごろから、熊本県内の一部の地域でようやく須恵器生産を開始するが⁽¹⁾、それまではすべて他地域で生産された須恵器がもたらされている。このような須恵器を生産できない地域において須恵器はどのように導入され、どのように展開していったのか。それが5世紀代末における須恵器生産の開始とどのように結びついていくのかということを解明することは、須恵器の研究のみならず古墳時代像を解明するためにも有益なものとなり得ると思われる。

そこで、本論では熊本県地域における5世紀代に属する須恵器（TK47型式併行までの須恵器）を集成し、その分布、出土遺跡の種類、器種組成、共伴遺物などを検討することから、熊本県地域においてどのように須恵器が受容され、展開していったのかを考えてみたい。

1 熊本県地域の5世紀代における須恵器の分布

熊本県地域におけるTK47型式併行までの須恵器を集成し、図と表に表したものが図1と表1・2である。これを見るといくつかの地域に固まって分布している状況がわかる。そのため、その分布に基づき、菊池川中・下流域、合志川流域、白川中流域、坪井川上流域、阿蘇谷地域、宇城地域、球磨川下流域、球磨地域、天草地域の9つの地域に分け、まず各地域における須恵器の出土状況を見てみたい。

なお、須恵器が図化されているものについては、図2・3に掲載しているので参照されたい。

菊池川中・下流域 菊池川中・下流域では、竈門寺原遺跡1号墳から出土したTK216～208型式併行の樽形甕が最も古い須恵器である。これらは主体部、周溝から出土している。

これに続く江田船山古墳、京塚古墳、虚空蔵塚古墳、塚坊主古墳からなる清原古墳群は、周溝確認調査の際にそれぞれから須恵器が出土している。江田船山古墳からはTK23型式併行の高坏、甕、器台、平底瓶、甕が、京塚古墳からはTK23型式併行の高坏、甕、子持ち壺、甕が、虚空蔵塚古墳からは蓋坏が、塚坊主古墳からはTK47型式併行の蓋坏、甕、器台等が出土している。

岩原古墳群では災害復旧のために調査が行われ、その際に土坑からTK23型式併行の甕が出土して

いる。

城ヶ辻7号墳では墳丘上の土器集中地点からTK47型式併行の高坏が出土している。

両迫間日渡遺跡では、剣形石製品などの石製模造品やミニチュア土器などと共伴してTK47型式併行の坏蓋が出土している。

合志川流域 合志川は菊池川の支流である。この河川の流域は朝鮮半島系文物等が多く発見されるなど、熊本の古墳時代中期を考える上で最も重要な地域のひとつとなりつつある。

八反原遺跡の資料は現在整理中であるが、TK73～216型式併行と思われるものからTK47型式併行までの須恵器が出土している。このうち2号墳から出土したTK73～216型式併行の須恵器は、熊本県内で出土した最古の須恵器である。なお、これらの須恵器には、馬具や馬の骨などが共伴している。また、馬の埋葬が行われている古墳もある⁽²⁾。

鬼塚古墳では、周溝からTK216～208型式併行の樽形甗、甗等が出土している。こちらも資料整理中である⁽³⁾。

高熊古墳では、周溝からTK208型式併行の器台が出土している。この古墳は近畿の工人が製作に関与したと思われる円筒埴輪を持つ古墳である。

石川山古墳群では、7号墳、8号墳は主体部から、9号墳は墳丘から須恵器が出土している。7号墳からはTK47型式併行の蓋坏、甗、器台、甗が、8号墳からはTK23型式併行の蓋坏、高坏、甗が、9号墳からはTK23型式古段階併行の蓋坏が出土している。

塚園古墳群では、4号墳の墳丘、周溝からTK47型式併行の高坏、甗が出土している。5号墳の周溝からはTK47型式併行の甗が出土している。

平町遺跡では、2軒の住居跡からTK208～23型式併行の甗の破片等が出土している。これらの住居にはどちらも竈が付設されており、タタキ目のある甑や鍋、曲刃鎌等の鉄器も共伴している⁽⁴⁾。

石川遺跡16号住居では、TK47型式併行の坏蓋が出土している。

白川中流域、坪井川上流域、阿蘇谷地域 白川中流域では、曲手西原遺跡1号住居跡からTK23型式併行の甗が出土している。住居の埋土からの出土なので、この住居の住人が使用していたものと考えられる。

坪井川は白川の支流で、白川の下流で合流する河川である。この上流域の熊本市硯川町で樽形甗が発見されているが、出土位置や詳細は不明である。

阿蘇谷地域では、長目塚古墳の前方部墳丘からTK216型式併行の器台、甗などが出土している。掲載した図面は器台2個体分であるが、実見するとこれらは各部位が非常にシャープに整形されており、透かし部分もきれいに面取りなどが施され、非常に丁寧な造りである。また焼成も抜群に良く、胎土もきめ細やかで、熊本に存在する須恵器の中で最も焼成、胎土、整形が良いものであると断言できる。甗は内面当て具痕が丁寧にナデ消されている。

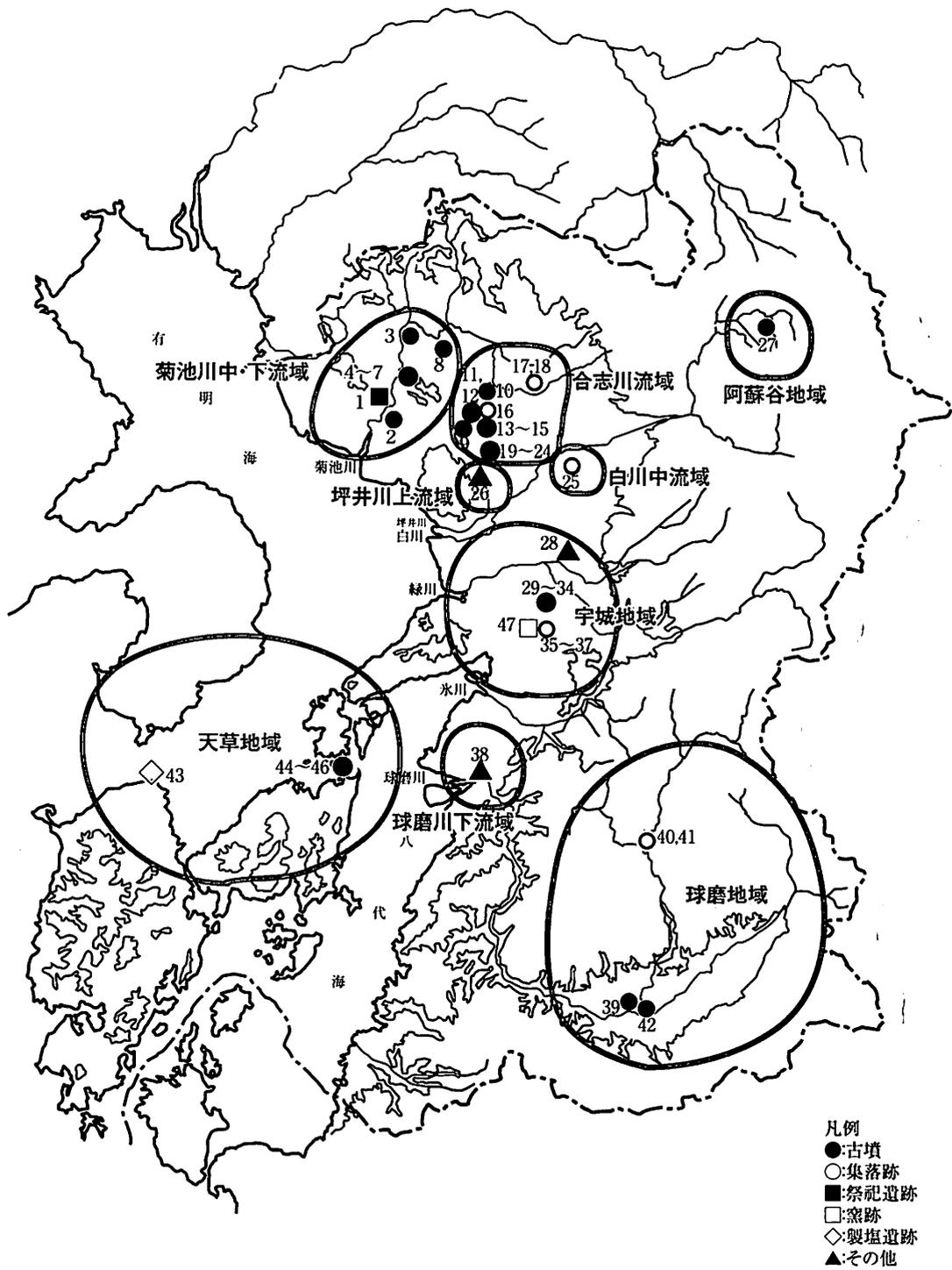
宇城地域 この地域は塚原古墳群など、多くの古墳が集中する地域である。

二子塚遺跡の樽形甗は発掘調査による出土ではないため、出土状況など詳細が不明である。

琵琶塚古墳からは、周溝からTK208型式併行の甗が出土している。

塚原15号方形周溝墓の周溝から出土した高坏は、陶質土器である可能性も高いが今回は取り上げた。時期的にはTK216型式併行のものだろうか。

丸山3号墳、20号墳、23号墳、32号墳の周溝からは、TK47型式併行の須恵器が出土している。3号墳からは蓋坏、高坏、器台、甗が出土している。20号墳からは高坏が、23号墳からは蓋坏が、32号



- 凡例
 ●:古墳
 ○:集落跡
 ■:祭祀遺跡
 □:窯跡
 ◇:製塩遺跡
 ▲:その他
- 1.両迫間日渡遺跡 2.城ヶ辻古墳群7号墳 3.竈門寺原遺跡 4.虚空蔵塚古墳 5.江田船山古墳
 6.京塚古墳 7.塚坊主古墳 8.岩原古墳群 9.鬼塚古墳 10.高熊古墳 11.塚園古墳群4号墳
 12.塚園古墳群5号墳 13.石川山古墳群7号墳 14.石川山古墳群8号墳 15.石川山古墳群9号墳
 16.石川遺跡16号住居 17.平町遺跡1号住居 18.平町遺跡14号住居 19.八反原遺跡2号墳
 20.八反原遺跡3号墳 21.八反原遺跡4号墳 22.八反原遺跡6号墳 23.八反原遺跡10号墳
 24.八反原遺跡13号墳 25.曲手西原遺跡1号住居跡 26.熊本市下硯川 27.長目塚古墳 28.二子塚遺跡
 29.琵琶塚古墳 30.塚原15号方形周溝墓 31.丸山3号墳 32.丸山20号墳 33.丸山23号墳 34.丸山32号墳
 35.古閑原遺跡1号住居跡 36.古閑原遺跡4号住居跡 37.古閑原遺跡一括 38.洗切貝塚 39.鬼塚古墳
 40.頭地田口A遺跡1号土坑 41.頭地田口A遺跡 42.覚井古墳群 43.沖ノ原遺跡
 44.カミノハナ古墳群1号墳 45.カミノハナ古墳群2号墳 46.カミノハナ古墳群3号墳 47.萩尾大溜池窯跡

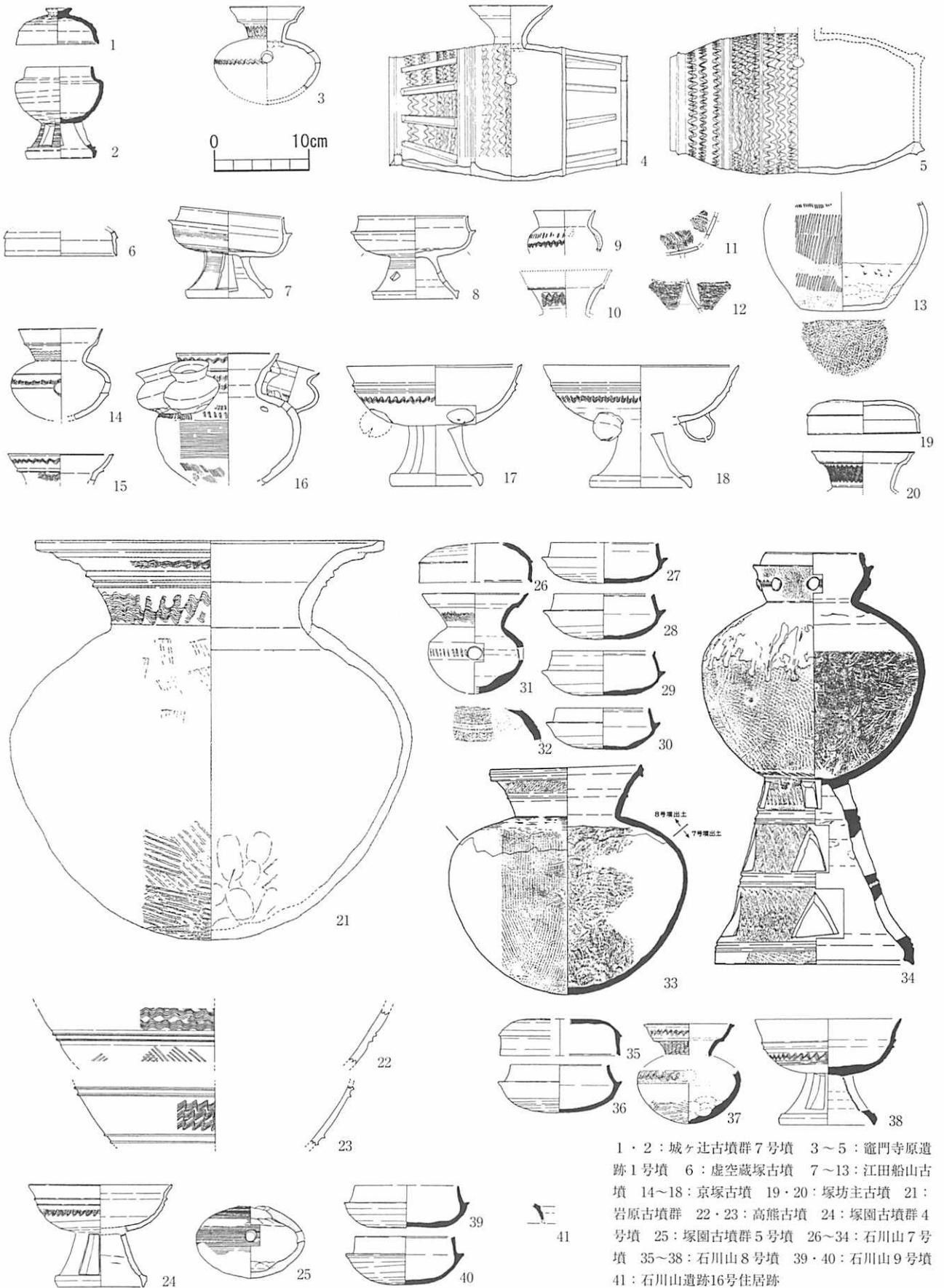
図1 熊本における5世紀代須恵器出土遺跡分布図

表1 熊本における5世紀代須恵器出土遺跡一覧表（1）

遺跡番号	遺跡名	所在地	出土須恵器	出土位置	須恵器の時期	共伴遺物	その他遺物
1	両迫間日渡遺跡	玉名市元玉名	蓋坏	祭祀遺構	TK47	石製模造品、手捏土器	
2	城ヶ辻古墳群7号墳	玉名市寺田字城ヶ辻	高坏	土器集中地点	TK47	土師器	須恵器、馬具、鉄剣、鉄刀、刀子、鉄鏃、釧、耳環、玉類
3	庵門寺原遺跡1号墳	玉名郡和水町大字庵門字寺原	甕、樽型甕	主体部、周溝内	TK216~208	鉄鏃、土師器	
4	虚空蔵塚古墳	玉名郡和水町大字江田字清原	蓋坏	周溝内	TK47	円筒埴輪	人物埴輪、須恵器、円筒埴輪
5	江田船山古墳	玉名郡和水町大字江田字清原	高坏、甕、壺、平底瓶、甕	周溝内	TK23	円筒埴輪	馬具、甲冑、鏡、陶質土器、鉄鏃、鉄刀、鉄剣、など
6	京塚古墳	玉名郡和水町大字江田字清原	高坏、甕、壺、甕	周溝内	TK23	円筒埴輪、形象埴輪	
7	塚坊主古墳	玉名郡和水町大字江田字清原	蓋坏、甕、器台、甕	周溝内	TK47	円筒埴輪	鉄鏃、馬具
8	岩原古墳群	山鹿市鹿央町岩原	甕	SK-05	TK23		
9	鬼塚古墳	鹿本郡植木町岩野	甕、樽型甕、甕	周溝内	TK216~208		
10	高熊古墳	鹿本郡植木町古閑字天神平	器台	周溝内	TK208	円筒埴輪、形象埴輪	
11	塚園古墳群4号墳	鹿本郡植木町大字岩野字塚園	高坏、甕	墳丘、周溝	TK47	土師器	
12	塚園古墳群5号墳	鹿本郡植木町大字岩野字塚園	甕	周溝内	TK47	土師器	
13	石川山古墳群7号墳	鹿本郡植木町石川字塚前	蓋坏、甕、器台、甕	主体部	TK47	土師器、鉄鏃、刀子、玉類	
14	石川山古墳群8号墳	鹿本郡植木町石川字塚前	蓋坏、高坏、甕	主体部	TK23	土師器、鉄鏃	土師器、須恵器、鉄鏃
15	石川山古墳群9号墳	鹿本郡植木町石川字塚前	蓋坏	墳丘	TK23古	土師器	馬具
16	石川遺跡16号住居跡	鹿本郡植木町石川字塚前	蓋坏	住居埋土	TK47		
17	平町遺跡1号住居跡	菊池市泗水町	壺、甕	住居埋土	TK23	土師器	
18	平町遺跡14号住居跡	菊池市泗水町	壺、甕	住居埋土	TK23	土師器、鉄鏃、鉄鏃、瓶	
19	八反原遺跡2号墳	合志市西合志町	甕	周溝内	TK73~216	刀子、馬具、土師器、馬歯	
20	八反原遺跡3号墳	合志市西合志町	甕、甕	周溝内	TK216	鉄鏃、馬具、土師器、馬歯	
21	八反原遺跡4号墳	合志市西合志町	甕	周溝内	TK208~23	馬具、馬歯	
22	八反原遺跡6号墳	合志市西合志町	確認できず	周溝内	TK23~47	馬具、馬歯	
23	八反原遺跡10号墳	合志市西合志町	確認できず	周溝内	TK23~47	馬歯	
24	八反原遺跡13号墳	合志市西合志町	確認できず	周溝内	TK23~47	馬具、馬歯	

表2 熊本における5世紀代須恵器出土遺跡一覧表(2)

遺跡番号	遺跡名	所在地	出土須恵器	出土位置	須恵器の時期	共伴遺物	その他遺物
25	曲手西原遺跡 1号住居跡	菊池郡菊陽町 大字曲手字西原	甕	住居埋土	TK23	土師器、鉄鏃?	
26	熊本市下硯川 出土品	熊本市下硯川	樽型甕		TK216~208		
27	長目塚古墳	阿蘇市一の宮町 大字中通字上鞍掛	器台、甕	前方部墳丘	TK216	円筒埴輪	内向花文鏡、鉄鏃、 刀子、太刀、玉類 (全て前方部石室)
28	二子塚遺跡	上益城郡嘉島町	樽型甕		TK216~208		
29	琵琶塚古墳	下益城郡城南町 塚原	甕	周溝内	TK208	土師器	
30	15号方形周溝墓	下益城郡城南町 塚原	高坏	周溝内	TK216?	土師器	
31	丸山3号墳	下益城郡城南町 塚原	蓋坏、高坏、 器台、甕	周溝内	TK47	土師器、鉄鏃、 刀子	玉類
32	丸山20号墳	下益城郡城南町 塚原	高坏	周溝内	TK47	土師器	
33	丸山23号墳	下益城郡城南町 塚原	蓋坏	周溝内	TK47	土師器	
34	丸山32号墳	下益城郡城南町 塚原	蓋坏	周溝内	TK47	須恵器 (6世紀代、皮袋 型須恵器)	
35	古閑原遺跡 1号住居跡	宇城市豊野町 大字山崎、下郷	蓋坏、甕、甕	住居埋土	TK47	土師器	
36	古閑原遺跡 4号住居跡	宇城市豊野町 大字山崎、下郷	蓋坏、甕、甕	住居埋土	TK47	土師器	
37	古閑原遺跡	宇城市豊野町 大字山崎、下郷	甕	遺物包含層	TK47		
38	洗切貝塚	八代市	樽型甕		TK216~208		
39	鬼塚古墳	人吉市願成寺町	蓋坏、甕、器台、 甕	墳丘	TK47		土師器、鉄鏃、金 具、短甲片
40	頭地田口A遺跡 28号土坑	球磨郡五木村甲	蓋坏	土坑埋土	TK47		
41	頭地田口A遺跡	球磨郡五木村甲	蓋坏、高坏	遺物包含層	TK47		圭頭鏃
42	覚井古墳群	球磨郡相良村	樽型甕 (土師器)		TK216~208	※土師器	
43	沖ノ原遺跡	天草市五和町	蓋坏、高坏	A区第Ⅱ層、 B区第Ⅲ層	TK47	土師器、 天草式製埴土器	
44	カミノハナ古墳群 1号墳	上天草市松島町 大字合津字上	蓋坏、甕、器台、 甕	石室内土砂 に混在	TK23	円筒埴輪	鉄鏃、鉄剣、刀子、 鉄斧、玉類
45	カミノハナ古墳群 2号墳	上天草市松島町 大字合津字上	蓋坏、壺、甕	羨道内埋土	TK23古	土師器	刀子、鉄剣
46	カミノハナ古墳群 3号墳	上天草市松島町 大字合津字上	蓋坏、甕	内部主体	TK47	鉄鏃	甲冑、鉄鏃、鉄刀、 刀子、玉類
47	萩尾大溜池窯跡	宇城市豊野町 大字山崎	坏身		TK47		



1・2：城ヶ辻古墳群7号墳 3～5：竈門寺原遺跡1号墳 6：虚空蔵塚古墳 7～13：江田船山古墳 14～18：京塚古墳 19・20：塚坊主古墳 21：岩原古墳群 22・23：高熊古墳 24：塚園古墳群4号墳 25：塚園古墳群5号墳 26～34：石川山7号墳 35～38：石川山8号墳 39・40：石川山9号墳 41：石川山遺跡16号住居跡

図2 各遺跡須恵器実測図(1) (Scale: 1/6)

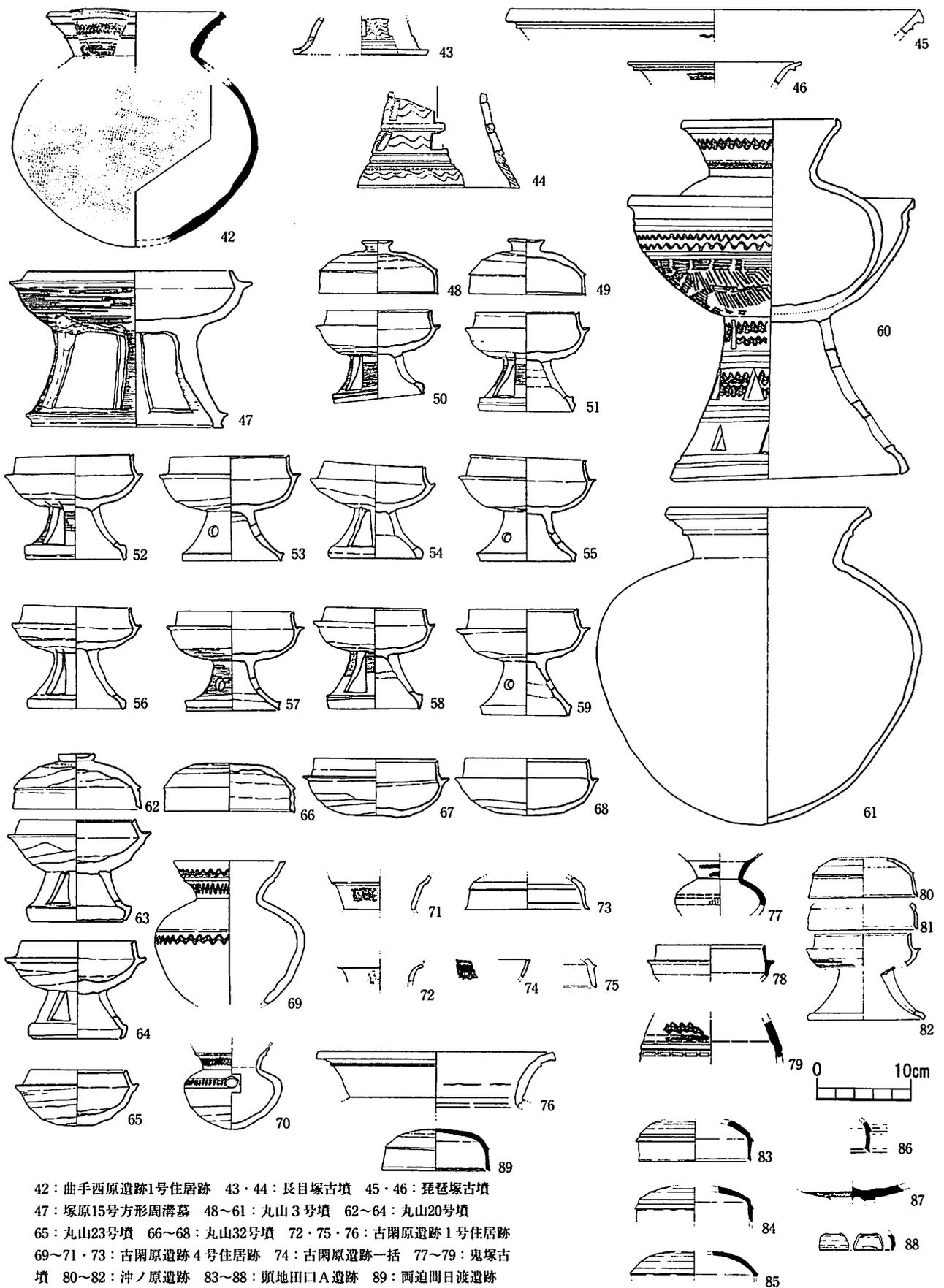


図3 各遺跡須恵器実測図(2) (Scale: 1/6)

墳からは蓋坏が出土している。

古閑原遺跡では、1号住居跡と4号住居跡と包含層からTK47型式併行の蓋坏、甕、甕等が出土している。

球磨川下流域、球磨地域、天草地域 球磨川下流域では、洗切貝塚で樽形甕が出土しているが、発掘調査による出土ではないため、出土状況などの詳細は不明である。

球磨地域では、覚井古墳群で土師器の樽形甕が出土しているが、こちらも発掘調査による出土ではないため、出土状況などの詳細は不明である。土師器だが樽形甕を模したもので参考までに取り上げた。

鬼塚古墳では墳丘からTK47型式の蓋坏、甕、器台、甕が出土している。

頭地田口A遺跡では、土坑や包含層からTK47型式併行の蓋坏、高坏が出土している。これらは同じ遺構面に存在する古墳時代の住居跡と関連するものと考えられる。

天草地域の沖ノ原遺跡では、天草式製塩土器に共伴してTK47型式併行の蓋坏、高坏が出土している。

また、カミノハナ古墳群では、本書第Ⅱ部で述べているように1号墳の石室内土砂からTK23型式併行の蓋坏、甕、器台、甕が、2号墳の羨道内埋土からTK23型式併行の蓋坏、壺、甕が、3号墳の内部主体からTK47型式併行の蓋坏、甕が出土している。

小結 以上が、各地域の状況である。この分布で注目したいのが、合志川流域での密集状態である。5世紀代の須恵器出土遺跡の3分の1はこの地域に集中している。続いて集中する菊池川中・下流域も含めると、分布の半数以上は菊池川の本流と支流に集中することになる。

またもう一つ注目すべき地域は、TK47型式併行段階の宇城地域である。ここでは須恵器を使った生活域、墓域、そして須恵器の生産遺跡がそろっている。

このような状況が生まれる要因を探るためにも、次に時期ごとの遺跡分布の変遷について見ていきたいと思う。

2 熊本における須恵器の導入と展開

これまで熊本県内における5世紀代の須恵器の分布について見てきたが、実際、熊本にどのような形で須恵器が導入されたのかを考えてみたい。そのためにまず時期ごとの須恵器の分布と、各時期においてどのような種類の遺跡で須恵器が用いられているのかについて見ていきたい。

図4は、須恵器の分布を4時期に分けて示したものである。これに沿って、各時期の状況を見ていきたい。

TK73～216型式併行期 この時期の須恵器出土遺跡は、合志川流域の八反原2号墳のみである。現段階ではこれが熊本県内出土の最古の須恵器となる。須恵器は甕で、周溝から破碎された状況で出土していることから、古墳で祭祀を行い、その後廃棄したものと思われる。つまり、熊本県域において古墳での祭祀に須恵器を使用した初例であり、熊本県内で須恵器が導入されたのは古墳にて須恵器を使用した祭祀を行うためだったということである。

ただし、古墳自体の規模は小さく、共伴遺物として馬歯や無引手鑿轡が出土しているが、被葬者は小豪族といったクラスの人物であったと思われる。

TK216～208型式併行期 この時期は特に合志川流域の遺跡数が他地域よりも多く、須恵器はほぼすべてが古墳からの出土である。この段階の古墳出土須恵器は、すべて周溝や墳丘から破碎された

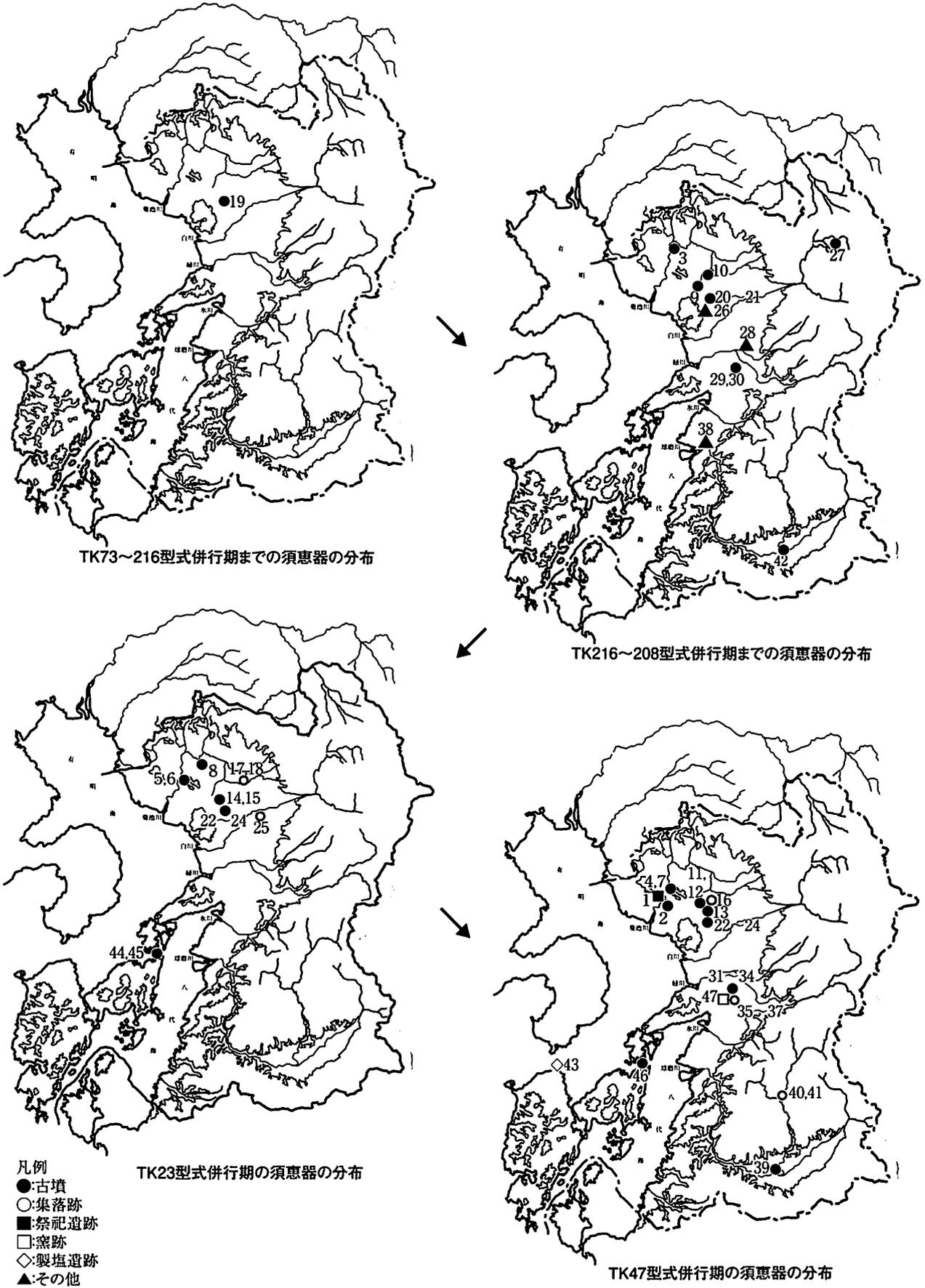


図4 5世紀代の須恵器出土遺跡分布の変遷

状態で出土していることから、古墳での祭祀のために使用されていた。また、この時期の須恵器は、甕、器台、甕といった祭祀に使用するような器種のみで、蓋坏、高坏は存在しない。そのため、出土状況などがよくわからない熊本市硯川出土樽形甕、二子塚遺跡出土樽形甕、覚井古墳群出土土師器樽形甕についても、本来は古墳にて祭祀に使用されたものである可能性が高い。

以上のことから、この時期は八反原2号墳ではじまった須恵器を用いた古墳祭祀が、合志川流域以外にも広がっていった段階だと考えられる。また、竈門寺原1号墳は周溝外周13.5mと小型だが内部主体は横口式家形石棺、長目塚古墳は前方後円墳、鬼塚古墳は周溝外周39mの大型円墳で主体部は家形石棺、高熊古墳は前方後円墳、琵琶塚古墳は前方後円墳というように、各地域における首長クラスの人物が葬られたであろう古墳で須恵器が出土している。つまり、この段階から首長クラスの人物も須恵器を使用した古墳祭祀を行うようになったといえる。

T K 23型式併行期 この時期は、合志川流域と菊池川中・下流域に分布が集中する。特に菊池川下流域では江田船山古墳を中心とした清原古墳群、合志川流域の石川山古墳群において須恵器が使用されている。さらに、天草地域のカミノハナ古墳群でも須恵器が出土している。これらの古墳では、周溝や墳丘から須恵器が出土しており、やはり古墳での祭祀行為後に、破碎して廃棄したものと思われる。ただし、この時期になると前段階まで甕、樽形甕が器種組成の中心だったのに対し、樽形甕が消え、蓋坏、高坏が器種組成の中心になる。この時期に祭祀行為の内容が変化したのか、それともそれまで土師器の坏と高坏で行っていたものが須恵器の坏と高坏に変わったのか、何にせよこの時期に何らかの意識変革があったことは確かである。また、石川山8号墳のように主体部に須恵器を副葬する行為やカミノハナ2号墳のように羨道に須恵器を添えるという、内部主体に須恵器を副葬するという行為がこの時期にはじまる。

なお、この段階で重要なことは住居跡から須恵器が出土するようになることである。平町遺跡では1号住居跡、14号住居跡の2軒の竪穴式住居跡から甕が出土している。どちらの住居跡にも竈が備え付けられているとともに甕あるいは鍋が伴う。それに加え、14号住居跡からは曲刃鎌、鉄鎌も共伴して出土しており、渡来人が居住していた可能性がある。

曲手西原遺跡1号住居跡からは甕が出土している。こちらは竈はないが、現時点で白川流域において5世紀代の須恵器を出土した唯一の遺跡ということもあり、今後注目すべき地域である。

ちなみに住居跡から出土する須恵器はすべて甕である。須恵器は土師器と比べ水をとおしにくく、液体の貯蔵に向いている。このことから、生活用具としての須恵器は、まず貯蔵具として取り入れられたといえるのではないだろうか。

T K 47型式併行期 この時期になると、熊本県の広い範囲で須恵器が出土するようになる。

合志川流域では、石川山古墳群、塚園古墳群などの周溝、墳丘などで出土する。石川山7号墳では前段階の8号墳に続き、主体部に須恵器を供献していたようである。また石川遺跡16号住居跡では坏蓋が出土している。この時期になって、集落において甕以外の器種も使用するようになったということがいえる。これは九州内の須恵器生産地が増加し、数的に須恵器が珍しくなくなってきたということもひとつの要因と思われる。

菊池川中・下流域では、塚坊主古墳など清原古墳群以外に、城ヶ辻7号墳でも須恵器が出土している。これらの古墳ではやはり古墳の祭祀において須恵器を使用しているようである。このほか、両迫間日渡遺跡の祭祀遺構からも坏蓋が出土しており、この時期になって古墳祭祀ではないその他の祭祀にも須恵器が使用されるようになったようである。

宇城地域では、琵琶塚古墳以来、須恵器を再び使用するようになる。特に丸山3号墳において、高坏を多く使用した古墳祭祀を行っている。これは6世紀代の宇城地域において、古墳から出土する須恵器の器種組成を見ると高坏が半数近くをしめるという状況と同じである。つまり丸山3号墳において行われた高坏を多く用いた祭祀行為が宇城地域に広まったということがいえるかもしれない。この時期に古墳における祭祀行為に対する何らかの意識的変化が起こったものと考えられる。

また、古閑原遺跡では住居跡から須恵器が出土している。この古閑原遺跡から直線距離数百mの位置に萩尾溜池窯跡が位置する。この窯跡はTK47型式併行期に須恵器生産を行っていたということが指摘されており、古閑原遺跡は須恵器製作集団の集落であった可能性が高い。そして、そこで生産された須恵器が直線距離2km未満の位置に所在する塚原古墳群へ供給されていたと考えられる。つまり、須恵器の生産・流通のネットワークがこの地域ではこの時期に成立していた可能性が高いといえる。しかし、この後、須恵器生産を行った確実な痕跡があるのはMT85型式併行段階で、その間どのような須恵器生産を行っていたのかについては現段階ではわからない。

球磨地域では、鬼塚古墳において墳丘から須恵器が出土しているため、球磨地域においてようやく須恵器を使用した古墳祭祀が行われたものと考えられる。また、集落遺跡である頭地田口A遺跡からも須恵器は出土しており、集落においても須恵器の使用がはじまったということができよう。

天草地域では製塩遺跡である沖ノ原遺跡から須恵器が出土している。これは製塩に携わる豪族が手に入れたものだろうか。現状ではここに須恵器がある意味について判断しかねる。カミノハナ古墳群では引き続き古墳祭祀を行っていたのだろう。

この時期は、全国的に見て第1次の地方窯の増加時期である。そのため、須恵器の流通量が増加した時期と思われる。そのため、前段階に比べ須恵器を入手しやすくなったのであろう。

小結 熊本県地域において、須恵器はまず古墳の墳丘上で行われる祭祀に使用されるために導入された。しかし、はじめは小豪族といえる被葬者が使用し、それが首長クラスの人物の墓に取り入れられ、古墳時代をとおして須恵器を使用した祭祀が広がっていく。

人々の生活においては、まず甕などの貯水機能の高い器種が導入される。その後、食べ物盛りつける蓋坏などの器種も徐々に取り入れられるが、古墳時代をとおしてあくまで土師器が中心的な役割を果たしていたようである。

宇城地域ではTK47型式併行期になると、須恵器の生産・流通体制が確立していた可能性がある。しかし、この体制は6世紀の前半には確認できない。その後確実に須恵器生産が行われるようになるのはMT85型式併行期になってからである。ただ、6世紀前半に位置付けられる窯跡等が今後見つかる可能性は高い。

3 熊本県地域における須恵器導入の契機

これまで、熊本県地域における須恵器の導入と展開について見てきたが、どのような契機によるものかを最後に簡単に述べてみたい。

まず、熊本県内で最も早く須恵器が導入された合志川流域の状況についてみてみたい。合志川流域において古墳が多く築造されるようになるのは5世紀になってからである。特に慈恩寺経塚古墳がその先駆けともいえるべき首長墳だと考える。この古墳は53mの円墳で、帯金式甲冑が出土している。これは近畿地方との強いつながりを示すものである。また、慈恩寺経塚古墳の次の時期に位置づけられる高熊古墳はB種ヨコハケが施された円筒埴輪を持ち、これは近畿地方の埴輪工人が関与したものと

考えられるものである。

さらに注目すべきは、八反原遺跡における馬の埋葬、馬歯の出土及び馬具の存在から考えられる渡来系儀礼的要素、平町遺跡における竈とタタキのある土器の存在から考えられる渡来系生活要素である。この儀礼、生活というふたつの要素から合志川流域には渡来人が存在していたと思われる⁶⁾。八反原遺跡は墳丘は小さいことと馬に関わる副葬が多いことから、渡来人の墓と思われる。

このように、合志川流域は近畿地方との強いつながりと渡来人の存在というふたつの大きな政治的要因を持っている地域である。これは渡来人のもたらす新しい文化を近畿地方の勢力が一元的に管理するために、この地域の豪族と密接なつながりを持つ必要があったことを示しているのではないか。その近畿地方とのつながりのはじめが慈恩寺経塚古墳の被葬者で、それから高熊古墳、石川山古墳群などの被葬者につながっていくのではないだろうか。

須恵器もこの流れの中で近畿地方からこの地域の首長や渡来人へもたらされたと考えられる。特に初期は八反原遺跡の渡来人に須恵器がもたらされている。それは、渡来人の祭祀に陶質土器の代わりになるものが必要であったため、八反原遺跡の被葬者にまず須恵器がもたらされたと考える。それから、須恵器の希少性から首長層に所望され、須恵器の使用が広まったのではないだろうか。

さて、合志川流域と同じような近畿地方との強いつながりと渡来人の存在というふたつの大きな政治的要因を持っている地域が宇城地域である。塚原古墳群内の將軍塚古墳では5世紀半ばのものと考えられる帯金式甲冑と二段逆刺鉄が出土しており、近畿地方との強いつながりを示している。また、宇城地域でも迎原西遺跡で竈、塚原古墳群で馬の埋葬が確認されており、渡来人の存在が考えられる。ただし、宇城地域で馬の埋葬が確認されるのは5世紀末～6世紀前半と合志川流域より若干時期が下がる。これは合志川流域とは違い、従来近畿地方とのつながりが強い地域に渡来人がやってきたあるいは住まわされたということができるかもしれない。なお、馬埋葬が行われる時期の開始が宇城地域で須恵器が再度使用されるTK47型式併行期と重なることから、この時期に宇城地域において渡来人が本格的に活動を行ったのではないかと考えられる。そうであるならば、TK47型式併行期のこの地域における須恵器生産にも渡来人が関与していたのかもしれない。

菊池川下流域の江田船山古墳、球磨地域の鬼塚古墳、天草地域のカミノハナ古墳群でも帯金式甲冑や独立片逆刺鉄が出土していることから、近畿地方とのつながりが強い地域であったといえる。須恵器もそのつながりの中でもたらされたと考えられる。

江田船山古墳では銀象嵌銘太刀の銘文に見られるようにその被葬者が近畿の政権に関与していた可能性が強く、特に近畿地方とのつながりが強かった地域であったといえる。

また鬼塚古墳は、それまで球磨地域では板石積石室墓など在地色の濃い埋葬形態だったものから、初めて横穴式石室を用いた古墳である。つまり、近畿とのつながりを示す遺物のみでなく、埋葬施設の大きな変化も伴っている。これは外部からこの地域に新しい文化が持ち込まれたとも考えられる。近畿とのつながりを持つ豪族がこの地域にやってきた、あるいは在地の豪族が近畿とのつながりにより新たな埋葬形態を取り入れたかである。

そして、カミノハナ古墳群は、特にその位置が水運上重要だったのではないだろうか。八代海と有明海双方に面し、八代海から有明海へ抜けるためには、非常に重要なポイントであるといえよう。

以上のように、須恵器が導入される契機は近畿地方とのつながりを持つ地域、渡来人が存在していた可能性がある地域ということがわかる。特に近畿地方とのつながりが確認できる地域であるといえる。

上述以外の地域については、判断する材料が少ないため現段階ではどのような契機で須恵器がもたらされたのかはわからない。ただ、阿蘇谷地域については弥生時代から鉄器生産を行っていたことが指摘されており、他地域よりも有力な地域だったと思われる。また阿蘇を越えて大分へ向かうための交通の要所であったとも思われる。そのため、近畿地方の勢力が阿蘇谷地域の首長とつながりを持ったということも推測できる。

おわりに

今回はTK47型式までの須恵器の分布、そしてそれを出土する遺跡の種類、須恵器の器種組成、共伴遺物などから、熊本県地域において須恵器がどのように導入され展開したのかを検討した。

その結果、熊本県地域の各地域と近畿地方とのつながりによることが最大の要因であるという結論に至った。また、渡来人の存在も重要な要因のひとつであり、熊本の須恵器生産の開始にも関わりがある可能性にも言及した。

ただし、現状ではTK47型式併行期までの須恵器の出土量自体があまり多くなく、その中でも最初期の須恵器であるTK73～216型式併行期までの須恵器はほとんど見つかっておらず、今後新たに出土する可能性は十分にある。そのような資料の増加を待って改めて論じることも必要であると考え。今後の資料の増加に期待したい。

注

- 1) 熊本では古墳時代の須恵器窯跡の本格的な調査例はほとんどないが、窯跡での表採資料等にTK47型式併行期の須恵器が存在することから、この時期には須恵器の生産が行われていたと考えられる（中原1997・2000参照）。
- 2) 八反原遺跡の遺物は現在整理中であり、その内容については桃崎2005を参照した。
- 3・4) 鬼塚古墳、平町遺跡とも、現在整理、あるいは発掘調査中であるにもかかわらず、本論で取り扱うことについて、調査担当者の中野幹彦氏、後藤克博氏から快諾をいただいた。ここでお礼を申し上げておきたい。また、鬼塚古墳については植木町教育委員会が作成した報道発表資料を、平町遺跡については熊本県教育委員会が作成した現地説明会資料を参考にした。
- 5) 西嶋剛広氏は、渡来人の存否の判断材料となるのは、生活の痕跡と儀礼行為に関わる要素であるとし、特に馬の埋葬行為が熊本県地域における最も重要な要素であるとしている（西嶋2005）。合志川流域と宇城地域は、馬の埋葬行為をし、生活の痕跡、儀礼行為も確認できることから、渡来人が暮らしていた可能性が極めて高いといえる。なお、前者は菊池川の中流にある支流である合志川沿い、後者は緑川の中流にある支流である浜戸川沿いという、“支流沿い”に位置するという地理的な共通点がある。

引用・参考文献

- 荒木隆宏編 2009『阿波間日渡遺跡』玉名市文化財調査報告第19集 玉名市教育委員会
- 池田朋生編 2005『岩原古墳群－集中豪雨被害箇所修復工事に伴う、平成14年度緊急発掘調査報告－』『熊本県立装飾古墳館研究紀要』第5集 熊本県立装飾古墳館：pp. 49-64
- 岡本勇人 2005『曲手西原遺跡』菊陽町文化財調査報告第4集 菊陽町教育委員会
- 緒方 勉・森山栄一 1982『清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査』熊本県文化財調査報告第55集 熊本県教育委員会
- 亀田 学編 2007『城ヶ辻古墳群』熊本県文化財調査報告第240集 熊本県教育委員会
- 隈 昭志編 1984『沖ノ原遺跡』五和町教育委員会
- 桑原憲彰 1987『京塚古墳』熊本県文化財調査報告第86集 熊本県教育委員会
- 後藤貴美子編 2002『平松遺跡 塚園古墳群』熊本県文化財調査報告第208集 熊本県教育委員会

- 坂本経堯 1962「阿蘇長目塚」『熊本県文化財調査報告』第3集 熊本県教育委員会
- 杉井 健 2006「琵琶塚古墳再考」『文学部論叢』第89号 熊本大学文学部：pp. 1-27
- 鶴嶋俊彦 1995「第IV章 鬼塚古墳の発掘調査の成果」『上ノ寺遺跡』人吉市文化財調査報告 人吉市教育委員会
- 豊崎晃一・清田純一編 1986『塚原古墳群発掘調査報告書-史跡・塚原古墳群整備事業に伴う調査I』城南町文化財調査報告第5集 城南町教育委員会
- 中原幹彦 1997「熊本宇城窯跡群の古墳時代須恵器-小林コレクション・徳本明氏採集品-」『肥後考古』第10号 肥後考古学会：pp. 41-50
- 中原幹彦 2000「熊本における須恵器生産開始の実体」『継体大王と6世紀の九州』熊本古墳研究会10周年記念シンポジウム資料集 熊本古墳研究会：pp. 77-93
- 中原幹彦編 2002「石川遺跡」植木町教育委員会文化財調査報告書第14集 植木町教育委員会
- 中原幸博編 1986「江田船山古墳」熊本県文化財調査報告第83集 熊本県教育委員会
- 西嶋剛広・中原幹彦編 1996「石川山古墳群II」植木町文化財調査報告書第8集 植木町教育委員会
- 西嶋剛広編 2004「I 高熊古墳第1次・第2次調査概要」『考古学研究室報告』第39集 熊本大学考古学研究室
- 西嶋剛広 2005「肥後における渡来系文物の受容と展開」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会発表資料 九州前方後円墳研究会：pp. 86-97
- 西田道世・佐藤伸二編 1976「船山」菊水町文化財調査報告第1集 菊水町教育委員会
- 西田道世編 2007「菊水町史 江田船山古墳編」菊水町史編纂委員会
- 野田拓治編 1975「塚原」熊本県文化財調査報告第16集 熊本県教育委員会
- 長谷部善一編 1995「竈門寺原遺跡」熊本県文化財調査報告第149集 熊本県教育委員会
- 花岡興史編 2000「古閑原遺跡」豊野町文化財調査報告第2集 豊野町教育委員会
- 前田軍治編 1994「器は語る 須恵器の美と技と」第4回企画展図録 熊本県立裝飾古墳館
- 桃崎祐輔 2005「九州における馬殉葬と初期馬具にみる渡来系要素」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会発表資料 九州前方後円墳研究会：pp. 201-248
- 山城敏昭編 2002「頭地田口A遺跡」熊本県文化財調査報告第206集 熊本県教育委員会

挿図・表出典

図1・4、表1・2は筆者作成。

図2・3の須恵器実測図の出典は下記の通り。

1・2：亀田2007より、3～5：長谷部1995より、6：西田・佐藤1975より、7～13：西田2007より、14～18：桑原1987より、19・20：西田・佐藤1976より、21：池田2005より、22・23：西嶋2004より、24・25：後藤2002より、26～40：西嶋・中原1996より、41：中原2002より、42：岡本2005より、43・44：坂本1962より、45・46：杉井2006より、47～68：野田1975より、69～76：花岡2000より、77～79：鶴嶋1995より、80～82：隈1984より、83～88：山城2002より、89：荒木2009より

補記

脱稿後、林田和人氏により紹介されている資料を記載していないことに気付いた（林田和人2004「熊本市千金甲古墳出土の須恵器について」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会）。それは、熊本市千金甲古墳出土とされる甕、山鹿市付城横穴群出土とされる甕、植木町高木原遺跡出土とされる甕、城南町石之室古墳出土とされる甕である。これらはすべてTK23～TK47型式のものだが、調査に伴って出土したものではなく、すべて遺構に伴うものかどうかは不明な部分がある。しかし、かりに遺構に伴うものとしても、本文で論述している趣旨に影響はない。